

# 新しき 年のはじめに

## 豊の年 しるすとならし 雪の降れるは

葛井諸会 卷十七・三九二五

たちがこぞって雪かきをするというのもまるでレクリエーションのようで、奈良時代の大和では厄介な程に雪が降り積もることがなかったのかもしれない。

宮崎県で生まれ育った私にとって、雪は珍しいものでした。今でこそ山間部に日本最南端のスキー場もありますが、平野部では雪が降ること自体が珍しく、一面の銀世界ということばに対してまるでおとぎの国のような憧れを抱いていたものです。

この歌では、新年早々の積雪を豊作になる前兆だと言祝いしています。雪が積もることが豊作の前兆だという発想は中国思想に基づいており、「宋書」や「文選」に例があります。万葉歌の例では、大伴家持の「新しき年の始の初春の今日降る雪のいよ重け吉事」(巻

### やまと 万葉がたり

二十・四五二六がよく知られているかと思えます。

催の酒宴が開かれ「雪」の酒宴が開かれ「雪」をテーマに歌を詠んだ、とあります。この時の歌が「首まごめて」に掲載されていて、さらに他に「大」にも歌が詠まれたようなのですが、その場で書き残さなかった

「万葉集」によると三九二五番歌は、746(天平18)年の正月に大雪が降り数寸積もった時に、左大臣橘諸兄が諸王や高官を連れて元正太上天皇の御殿に参上して雪かきをした、そこで天皇主

【訳】新しく来た年の初めに、豊作の年の前兆をみせるらしい。雪が降り積もるのは。

現在の明日香村では毎年2、3回程度雪が積もります。雪化粧した明日香村の情趣はまた格別です。(県立万葉文化館指導員・井上さやか) 二原則、隔週掲載

わが背子せこに見せむと思おもひし 梅の花

それとも見えぬ 雪の降れば

山部赤人 巻八・一四二六

万葉文化館の近くには、蠟梅ろうばいの群生地があり、早くもロウ細工のような可憐な花が咲き、周囲に甘い香りを漂わせています。私の好きな花の一つです。ただし、蠟梅はクスノキ目ロウバイ科ロウバイ属、一般的な梅はバラ目バラ科サクラ属で、植物学的には別属だぞ

うです。 蠟梅はおいておくとしても、1月から2月にかけて咲く花と言え、梅が思い浮かぶという人も多いのではないのでしょうか。 この歌では、梅の花を恋人に見せたいと思っていたら、一面に降った雪に紛れてしまったところに花があるか

やまと 万葉がたり

わからなくなってしまう、とあります。現代には紅梅も一般的ですが、雪と見まがうというのですから、当時詠まれたのは白梅だったようです。早春に咲く花だからこそ、降る雪に紛れるという幻想的な風景も生まれま

す。 同様の発想は、73

0(天平2)年に大宰府で開催された梅花の宴の際に大伴旅人が詠んだ「わが園に梅の花散るひさかたの天より雪の流れ来るかも」(巻五・八二二)などにもみられます。「万葉集」で秋の次に【訳】いとしい人に見せたいと思っていた梅の花は、

どこともわからない。雪が降ってしまったので。

です。

そもそも梅という植物自体が大陸から渡来した物でした。塩梅ということばがあるように古代から調味料として使われ、烏梅と呼ばれる薬製は漢方薬や染料として珍重されます。いずれも白梅の実を加工したもので、まずは実用的な目的で持ち込まれたとみられています。(県立万葉文化館指導 研究員・井上さやか) 原則、隔週掲載